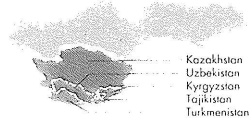


第9章 独立後に現れたノスタルジー



独立後の公式な『ウズベキスタン史』はソ連時代をそれほど評価せず、むしろソビエト政権はウズベキスタン国民の言語、宗教、文化といった独自性や自由を奪ったと描いている¹⁾。そのような過去とは対照的に、政治家や政府関係者の主張によれば、独立こそ国民が待ち望んでいた民族的、宗教的、社会的な自由を与えるもので、それは彼らが長年苦しんできたソビエト政権下の統制からの離脱をも可能にしたというものである。

このことは多くの国民も認識しており、それはソ連時代の言語や宗教に対する過剰な抑圧についての証言にも現れている。しかし、同時に、国民の間にはソ連時代の良い部分を強調する人々も現れている。彼らは個別の問題を批判的にみながらも、この時代を懐かしく想起している。ソ連時代を懐かしむ人の中には、80年代後半から90年代前半にかけての時代をもっと強く拒否する人が目立つのも興味深い点である。

ペレストロイカ時代、このようなソビエト政権に背を向けていた人は、ソ連という国を作り上げた彼らの上の世代の保守主義と平凡で「社会主義的に」平等な生活を批判した。彼らにとってソ連で作られた洋服、電化製品、食料品などは、その質が欧米のものに比べて低いことから、これを笑い話の対象とし、海外から輸入された商品とその生活スタイルを美化するのだった²⁾。

それから18年が経ち、こうした人々の多くはソ連時代の生活の安定、人間関

1) 近年になって、このような問題に現地の歴史研究者も気付き始め、より客観的な歴史の描き方を呼びかけ始めた。このことに関して興味深いのは、Dilorom Alimova, *Istoriia kak istoriia, istoriia kak nauka*, Tashkent : Uzbekistan, 2008. 特に24-64頁参照。

2) このような批判とソ連のこれまでの歴史の全否定に対し、1991年に一部の知識人から批判があり、彼らはそのようなソ連史の全否定と全面的な批判を感情的な「自分否定」とヒステリーにたとえた。例えば、Valentin Tolstykh, *My byli : Sovetskij chelovek kak on est'*, Moskva : Kul'turnaia Revolutsiia, 2008. 12-13頁参照。

系の良さなどを強調し、逆にその時代の良さを語るようになった。今になって彼らから当時の商品の安さや電化製品が比較的丈夫だったという話が絶え間なく聞こえてくる³⁾。まさに、ソ連時代の評価についての逆転現象が生じているのである⁴⁾。

このように、十数年前に自分たちの過去を批判し拒否してきたウズベキスタンの人々が今、ソ連時代のどの部分を懐かしんでいるのだろうか。本章ではこのような社会的な現象を検討する。

1. ソ連時代の社会と価値観

1.1 ソ連という祖国に対する誇りとノスタルジー

ソ連時代を生きた人々の中には、たとえウズベキスタンに住んでいても、ソ連を祖国として認識していた人が少なくない。そのことから、ソ連崩壊は彼らに、自分たちの国がなくなってしまったという喪失感と絶望感をもたらした。それから18年間経った現在でも彼らはかつてのことを誇りに思い、失ってしまった大国に対しノスタルジーを感じている⁵⁾。それは単に、他の地域と異なる独自の社会主義のイデオロギーとそれに基づく国家建設の独自の哲学、政治力、経済力と最強の軍事力といったソ連が達成してきたことへの懐かしさだけでなく、自分たちがその国を作り上げたソビエト国民であったという特別な思いである⁶⁾。

3) その一例として、ソ連時代にモスクワで作られたソーセージや食料品を過剰に評価する複数の証言については、T.S.Kondrat'eva, "Obladateli 'Kremlyovki' i lyudi na khlebnykh mestakh", T.S.Kondrat'eva, A.K.Sokolova, *Rezhimnye lyudi v SSSR*, Moskva : Rossiiskaia Politicheskaiia Entsiklopediia, 288-289頁参照。

4) ロシアにおいても同じ過程がみられたが、近年歴史と現在の間に妥協を探り、より客観性があるソ連時代の分析を試みる文献がみられる。例えば、Albert Ivanov, *Put' Rossii v XXI vek*, Moskva, 1992 ; Albert Ivanov, *Sud'ba Rossijskogo Otechestva*, Moskva, 2002 ; Albert Ivanov, *Chto est' Nasha Zhizn'*, Moskva-Orel, 2007 ; Andrei Ashkerov, *Putiniada*, Moskva, 2007参照。これらの文献は過去を美化しすぎず、現在否定に慎重でバランス感がある歴史感を追及している。ウズベキスタンにおけるこのような試みとしては、Marfua Tokhtakhodzhaeva, Dono Abdurazzakova, Almaz Kadyrova編, *Sudby i vremya : Shtriki k proshlomu Uzbekistana v ustnykh rasskazakh zhenshchin-svidetelei i Sovremennits Sobytiy*, Moskva : Institut Otkrytoe Obschestvo Fond Sodejstviiia, 2003やMarfua Tokhtakhodzhaeva, *Otmish Toliqirgan Ayollar: ozbekiston zhamiyatning islomga qaitishi va hotiqizlar ahvoli*, Toshkent, 2002があるが、これらにおいてはやはりソ連時代の美化の傾向が強く、現在の否定が目立つ。

人々は独立によって新しいアイデンティティを得たものの、国としては世界各地で起こっている問題への発言力を失った。それだけでなく新しく独立した国々が欧米や中国などから援助を受けたり、これらの投資に頼らざるを得ない状況に陥ったりしている。ソ連時代を経験した人の多くがそれを侮辱だとして受け止め、現在のウズベキスタンには、かつてソ連に抱いていたような誇りを持ってなくなっている。そのため、ソ連という経済面でも政治面でも強く、他の国に頼らない国の国民だったことをより強く誇りに感じていることがわかる。

今になって言うのは良くないかもしれないけれど、あの時期をもう一度経験し、あの時期をもう一度生きてみたい。当時、私は2人の子供を1人で養っていたが、まったく問題なく育てていた。幼稚園はほぼ無料で、学校と大学も同じだ。* (証言者No. 18, タタール人, 女性, タシケント)

こうした個人的なノスタルジーとこれまでに述べたソ連時代の政治、経済、社会の体制に対するノスタルジーとが合致し、それがウズベキスタン国民の40代以上の大半に共有されているように見受けられる⁷⁾。

証言者が語るのは、ソ連時代には失業者がなく、ホームレスの人も存在しなかったことである。また、現代社会が直面しているテロや民族間の緊張もほと

5) ノスタルジーという言葉は二つの部分から成り立っており、nostos (懐かしがる) と algia (家) である。この言葉が初めて導入されたのは Hofer Johannes という医師によるものであり、1688年にホームシックになったスイスの兵士や労働者を襲った病名として使われた。詳細については、Hofer Johannes, *Dissetatio Medica de nostalgia*, Basel, 1688 (Svetlana Boym, *The Future of Nostalgia*, New York: Basic Books, 2001 からの引用)。Boym氏によると、似たような分類化は Roman Jakobson にもみられる。Jakobson Roman, "Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances", in Krystyna Pomorska and Stephen Rudy, eds., *Language in Literature*, Cambridge: Harvard University Press, 1987 参照。(本文は前頁)

6) Boym Svetlana 氏によると、2タイプのノスタルジーが存在しており、その一つは皮肉型であり、もう一つは修復型である。皮肉型のノスタルジーは過去の出来事を皮肉な目でみつつ、その時の出来事を繰り返したいというより、その時代の雰囲気、人間関係や非物理的なことに対して懐かしさを感じることを意味する。修復型のノスタルジーは、(物理的な意味での) 過去そのものをもう一度繰り返すことを意味する。ここでいうノスタルジーの一部には、修復型 (例えば、昔の福祉に対する憧れなど) も含まれているが、主に皮肉型のノスタルジーを意味している。これらのノスタルジーの違いとその詳細については、Svetlana Boym, *Obschie mesta: Mifologija povesednevoi zhizni*, Moskva: Novoe Literaturnoe Obozrenie, 2002, 293-304 頁参照。(本文は前頁)

7) ノスタルジーに関しては、Jean Starobinski, "The idea of nostalgia", *Diogenes*, N.54, 1966, 96 頁; Susan Stewart, *On Longing*, Baltimore: John Hopkins University Press, 1985; David Lowenthal, *The Past is a Foreign Country*, Cambridge: Cambridge University Press, 1985 参照。

んどなく、皆お互いに純粋な気持ちで接していたという。さらに、国家の構成に関しても、現在欧州連合がようやくできたが、その構造はソ連の中ですでに実現されていたもので、欧州連合ができる70年前にソ連ではその段階に達成していたという。そうした意味で多くの人は欧州連合の形成過程に冷めた視線を送っており、反対にソ連が達成したことへの評価は高い。

私はソ連時代にコルホーズで働いた。当時は仕事がないということはなく、皆働いていた。そして働いた分の給料をきちんともらっていた。その給料で家族を養うことはもちろん、ロシアや他の共和国にも旅することができたので、自由に行き来して同じ村の人におみやげを買って帰ったものだ。ロシアでは誰も「お前は誰だ」、「どこに行くんだ」、「目的は何だ」とか言わなかった。

今はどこに行ってもお金を取られる。税金やら何やらで、かなりの額を払うことになる。(証言者No. 38, ウズベク人, 男性, フェルガナ)

以下の証言もソ連という国とその時代を非常に感情的な表現で語っている。

私の人生で良かったことはすべてソ連時代とともにある。もちろんあの時代に対してノスタルジーもある。

皆好きなところへ行き、好きなことをしていた。ソ連はソ連だった。共通のお金、共通の世論、共通の政党とそのリーダーがいたからだ。(証言者No. 21, ロシア人, 女性, サマルカンド)

しかし、このような思いをすべての世代が共有しているわけではない。年齢が高いほどその気持ちは強く、若くなっていくにつれてノスタルジーは弱まり、30代というソ連を覚えている最後の世代では非常に弱い。

1.2 ソビエト型の「自由な」社会

ソ連時代が多くの人にとって魅力的にみえるもう一つの理由は、ソ連という国が独裁的で共産党の圧倒的な支配下にあったにもかかわらず、今のウズベキ

スタンより自由な雰囲気であったという国民の認識からである。数多くの証言者によれば、ソ連時代は個人の自由度が今よりも高く、政府の規制や制限は現代のウズベキスタンの方が多い。また、何に怯えることもなく、家に鍵をかけて生活することはほとんどなく、夜遅くまで出かけていても帰り道を不安に思うことはなかった。それだけ社会全体が安定しており、それが人々に安心感を与えていたという⁸⁾。

それに加えて、彼らが言う自由は単に治安に限ったものではなく、経済面での自由も含まれている。現在では彼らの多くは毎日のスケジュールに追われ、仕事場と家の往復で1日が終わるが、ソ連時代は仕事と生活が確保されており、残業や過剰な労働などする必要がなかった。当時は多くの人々が、仕事が終わってから外出し、自由な時間が今よりも多かったようだ。休暇を取るのは当たり前で、夏休みに旅行をするのはごく自然なことであった。彼らが覚えているソビエト社会では暗黙の自己規制などがあっても、目にみえるような規制や行動制限がなく、自分たちを自由な人間だと感じていたようだ⁹⁾。

このような証言や当時を経験した世代の印象は必ずしも正確なものとは言えない。ソ連における共産党の監視や制限は数多く存在しており、ソビエト社会も完全に自由で健全なものだったとはいえない。

この時代の生活も非常にパターン化されており、高校から兵役もしくは大学に進み、卒業すると就職した。就職も個人の希望ではなく、「国が必要とする」ところへ配属される。海外留学も制限されていたので、人々の自由度はそれほど高かったわけではなかった。

夫は当時若い医者で、大学側からシルダリヤ州の病院に行くよう指示された。彼は1人で行くのは嫌がっていたので私と一緒に行くよう勧められた。

私は学校でピオネール（少年少女を対象とした共産主義教育組織）の指導員をしていて、夏に大学入試を控えていた。彼は「来年の春に入試を受け

8) ロシアについての似た主張に関しては、Valentin Tolstykh, *My byli : Sovetskij chelovek kak on es'*, Moskva : Kul'turnaia Revoliutsiia, 2008, 38頁やNatal'ya Kozlova, *Sovetskie lyudi : Stseny iz istorii*, Moskva : Evropa, 2005参照。

9) 以上の一般の人の証言に加えて、多くの解説者もこのような意見に賛同している。例えば、Natal'ya Kozlova, *Sovetskie lyudi : Stseny iz istorii*, Moskva : Evropa, 2005参照。

ればよい」と言い、私をシルダリヤ州に連れて行った。私は現地の学校でもピオネールの指導員になった。その後、大学への入学を果たしてから外国語の先生として働いた。

しかし子どもが生まれたので、シルダリヤ州から引っ越したいと彼に言い始めた。そこでの生活はあまり気に入っていなかったし、蚊がとて多くて子どもにも良くないと思い、それで引っ越すことにした。(証言者No. 28, ロシア人, 女性, ナマンガン)

日常生活では政府が支給するアパートはどれも似かよっており、彼らが買う家具や洋服の選択肢も限られていた。男性の長髪やジーンズ着用は警察官から注意を受け、年寄りから批判されていた。

しかし、多くの証言者はそのような制限を記憶から消し去り、良い部分のみを残している印象を受ける。その理由はいくつかあるが、なかでもっとも重要なのは彼らの今日の立場や社会的な状況からくるものである。そうしたことから彼らは現代ウズベキスタン社会における政府の監視やコントロール、制限と生活の不安などを視野に入れてソ連時代を語るため、今より自由だったと思えてくるのである。

1.3 ソ連時代の人間関係

ソ連時代を語る時、多くの人が口にするのは人々の関係が純粹で温かいものであったということである。それがノスタルジーを感じるもう一つの要因にもなっている。

学生時代は必ず目上の人には敬意を示し、病氣や戦争で亡くなった人に対しても尊敬と感謝の気持ちをいつも持っていた。祝日の度に、年を取った人の家を訪ねて健康面や悩みなどを聞いて回った。当時は「年寄り手伝い隊」というのがあり、私もできる限り手伝っていた。今、子どもがいるのに親や祖父母を老人ホームに入れる人が増えているけれど、それをみるのは辛いし、正直言うと理解しがたい。

私たちの家はタシケントの近くのキブライにあり、近所の人との仲は非

常に良かった。マハッラ内でも皆お互いのことを知っていて、家を行き来していた。今のマハッラでは近所に誰がいるのかもわからない。

テレビの放送政策についていえば、ソ連時代は何でもかんでも放送することはなかった。その政策は大変正しかったと思う。今のテレビをみていると、半分裸の役者も出ているし、ポルノもある。歌番組には何の才能もない人が出てきて私たちの時間を無駄にしているように思う。他にも気になることはたくさんあっていい出すと切りがない。子どもは学校から戻ると1人で家にいるから、好き勝手にテレビをみていて、心配になってくる。

しかし、うれしいこともある。それは学校の制服が復活したことだ。独立後は制服を着なくてもよかった時期があったけれど、今また着用が義務付けられている。ある家の子どもは良い服を着て、別の家の子どもはあまり服がないなんて、着る物で子どもの間に差が出てはいけない。それをなくすためには制服が必要だ。

こうして話をしていると、何より自分の明日に確信を持たせたことをはっきり思い出す。私たちが共産党員で共産党を信じきっていたこともあって、当時のことを悪く思えない。給料も悪くなかったし、それなりの生活ができていた。教育や医療は無料で受けられ、幼稚園はほぼ無料であり、学校では教科書ももらえた。色々なキャンプに子どもは無料で参加できた時代だった。(証言者No. 31, ロシア人, 女性, アンディジャン)

このような経済的な余裕から、人々は誰にも現在よりも優しく接することができ、様々な苦勞や問題を皆で力を合わせて乗り越えようとしていた。また、大だけでなく子どもたちの価値観にも影響した。親が仕事に行っている間は家を任されるのが当たり前で、大人がそれを特別に褒めることはなく、子どもらは文句も言わず手伝っていた。

私には兄弟が4人いて、羊や牛に餌をやったり、鳥小屋を掃除したりして、家事を手伝いながら家畜の面倒もみていた。夜両親が帰ってくると、それぞれが自分の任された仕事の報告をした。(証言者No. 37, ウズベク人, 女性, タシケント)

本書のコミュニティに関する部分にもあったように、人間関係は家族間のみならず、近所付き合いにも反映され、特にウズベク人が多い地区では近所の人との境界線を引くことなく、家族同様に接していた。その近所付き合いは、あえて特別な機会を設けなくても日常の中で維持されていた。お祝い事があった時など、以下の証言のように皆でそれを祝いコミュニティの一体感をさらに強めたのである。

私たちが住んでいた通りには友達の家も多く、毎年新年会を開いていた。私の夫は「雪男」の格好をして、私は「雪女」の格好をした。そして同じ通りに住む人の子どもを呼んで祝っていた。(証言者 No. 6, タタール人, 女性, タシケント)

2. ソ連時代における日常生活と政治

2.1 政策と生活の改善

以上にも述べたように、ソ連時代を語るとき人々が強調するのは生活の良さである。そのことから彼らはソ連時代を「古き良き時代」として郷愁を抱く。しかし、彼らの多くは単に安定した生活だけでなく、むしろソ連時代を通して生活が良くなっていったことが特に印象に残っているようである。

ソ連の成立当初は国民の生活はそれほど良くなく、彼らは幾多の問題を乗り越えなければならぬ状態だった。その経済的に困難な状況の中でも様々な手段を使い生き残ってきた。彼らは当時の状態を非常に厳しいものとして思い出すが、そこから脱け出すことができたのは、彼らの生活を視野に入れて政策を進めたソビエト政権のおかげだとも思っている¹⁰⁾。

証言者の多くが強調するのは、ソ連時代の歴史が非常に前向きなものであったという点だ。貧しい社会が少しずつ良くなっていく様子を歴史の教科書から学ぶのではなく、身をもって経験したのである。以下の証言はその一例である。

ソビエト政権の発足当初は辛い時期だった。私は1934年に生まれ、貧困を経験した。コーンのパンを食べたり、草を焼いて食べたりして、何とか生

き延びた時期もあった。父が鳥をつかまえてきて私たちに食べさせてくれたこともあった。そうやって必死に育ててくれた。

私の兄も家の手伝いをしたり、金銭的な面でも支えてくれた。彼はフェルガナ・カナルの建設で会計士として働き、ある日はお米を、ある日は小麦を持って帰ってくれた。それを使って私たちはピラフやパンを作ったりした。私はまだ子どもだったが、親が持って来た布で自分や妹や弟のために服を作っていた。その経験が私自身のためにもなり、今でも孫たちに服を作っている。

私の夫の話では、夫の父親が彼に与えた布団と枕を使って学生時代を過ごしたそうだ。私たちには足りないものが多く、困難の中で育った。しかし、その後の時代はとても良く、何でもあった。白いパンはいつもあり、最高の小麦で作られたパン類が市場に出回るようになった。しばらくすると、お腹を空かして過ごした時期を忘れてしまったほどだ。(証言者 No. 37, ウズベク人, 女性, タシケント)

別の証言者はソ連成立当初の経済的困難に加えて、戦争直後の経済的な問題を以下のように振り返る。

私たちが住んでいた地区は家にお風呂がなく、共用だった。大人は16ティン、子どもは8ティンを払い、皆並んで順番に入っていた。私も兄弟を連れて行った。風呂場は狭かったけれど、しかたがなかった。1958-60年の話だ。

それ以外に記憶に残っていることは、61年にフルシチョフが通貨の改革をし(10ソムが1ソムになるなど)、パンが一気に店からなくなってしまったことだ。それが改革と関係あるのかどうか私にはわからないけれど、子どもだった私はパンを求めて夜中から列に並んでいた。そこではいつも誰かがケンカをしていて、大ゲンカになったこともしばしばある。不思議なことに、チーズ、ハムなどパン以外のものはすべてあるのに、パンだけがなかつ

10) 政府と国民の間の合意と国の福祉に関する責任が時間とともに変容したものの、ソ連崩壊直前までに政府が人々の生活水準に関する責任をある程度果たしており、その後、その責任は政府から人々の就職先などに移行した。その一例と当時の状況については、T.S.Kondrat'eva, "Obkladateli 'Kremlyovki' i lyudi na khlebynykh mestakh", T.S.Kondrat'eva, A.K.Sokolova, *Rezhimnye Lyudi v SSSR*, Moskva: Rossiiskaia Politicheskaiia Entsiklopediia, 2009, 279-302頁, 特に296-299頁参照。(本文は前頁)

た。(証言者No. 25, ウズベク人, 女性, ナマンガン)

このような経済的な困難があったにもかかわらず、多くの証言者は社会の動向として、生活がどんどん良くなっていることを実感しており、あらゆる問題は一時的なものとして考えていた。定期的に起こる経済の問題やそれに関連した食品不足は人々に不満をもたらしたものの、生活や将来に対しては不安や絶望感を持っていなかったようだ。

ソ連時代の良い記憶は、生活が日々進化していたことだ。1968年の冬は寒くて作物が育たなかったため、その年の夏には作物が(市場に)あまりなかった。しかしその後は、生活状態は落ち着いて、食べる物には困らなくなった。同じくらい厳しい時期がソ連時代の終わり頃に訪れた。それは68年とは比べものにならないほど厳しかった。(証言者No. 21, ロシア人, 女性, サマルカンド)

この意見に加える形で、以下の証言者は、ソビエト政権時代に経済的な問題があったとしても、それは様々な要因から生じたものであり、ソビエト政権が引き起こしたものではないと主張する。そういう見方をする理由には、当時のソ連のイデオロギーや教育の影響があると思われるが、それ以外としてはソビエト政権とソビエト制度に対する信頼と、長年その信頼が裏切られなかったことが挙げられる¹¹⁾。

ソビエト政権時代はとても良い生活を送った。私と夫は共働きだったこともあり、それほど経済的に困ったことがなかった。仮に、困った時期があったとしても、それはソビエト政権のせいだったとは言えない。

私は41年間学校の教師をし、今は年金をもらって暮らしている。私たちは一所懸命働き、家を建てた。自分の人生を本当に幸せに感じている。国は

11) この信頼を分析するものとしては、Timur Dadabaev. "Power, Social Life, and Public Memory in Uzbekistan and Kyrgyzstan". *Innnerasia*, N. 12, 2010, 23-45頁参照。

私たちを認めている証拠に、私には10万ソム、夫には6万ソムの年金をくれる。そして様々な場に招待されて、交通機関や医療などのサービスも無料で受けている。このような生活に感謝している。私たちの子どもにも全員子どもがいて、皆平凡に暮らしている。(証言者No. 48, タジク・ウズベク人、女性、ブハラ市)

2.2 人々の日常生活と党・政府の役割

ソ連時代の国民と政治の関係をみると、以上にも述べたように人々は日常生活の改善を実感しており、ソビエト政権を高く評価していた。そのような経済成長と生活の改善が作り上げた政権支持の社会的なコンセンサスは、国民の政治への関心と参加意欲を弱めた。

彼らの中でも、共産党員であり、党の大会や政治イベントに参加する人は多かったが、ほとんどの場合、それは政治的な方針を決める場ではなく、共産党が決めた方針を実行する立場と役割を与えられる場であった。それに対して国民の多くはそのような社会の実状に挑戦しようという気持ちを持たなかった。なぜなら、経済面で彼らはこれまでに経験したことのないほど安定した生活を送っており、政治参加の動機はそれほどなかったからである¹²⁾。むしろ、経済成長がそのまま維持され、より高い水準の生活を期待した人が多かった。共産党と政府はまさにそのような生活水準の向上と生活の安定を確保する機関とみなされていた。

当時は、仕事に対するまじめな姿勢と責任感があった。そして、国と共産党により教育と研究に力が入れた。中等教育機関に与えられた重要性は、ある意味ではソビエト政権と共産党があったからこそ得られたことである。それを私たちはもっと認めるべきだと思う。(証言者No. 3, ウズベク人、女性、タシケント)

12) このことを懐かしがる人は少なくない。例えば、Valentin Tolstykh, *My byli : Sovetskij chelovek kak on est*, Moskva : Kul'turnaia Revolutsiia, 2008参照。

このように国民と共産党・政府の間には明確な役割分担があり、共産党・政府は政治的な方針を決めて国民に説明し、人々はそれに従って実行していた。この時代に生きるのは非常に楽であり、特に政治や政策のことは考えず、自分の仕事をしっかりしていれば結果がついてきたという意見もある。そういう意味ではウズベキスタンのみならず他のソビエト共和国でも多くの人は平凡な日常を送り、自分たちと共産党・政府との役割を別個のものとして理解していた¹³⁾。

こうした社会構造は人々の政治への参加を制限したが、同時にそれが安心感を与えたようだ。以下の証言のように、その気持ちは人々のお互いに対する姿勢にも反映されていた。

若い時の思い出は良いものばかりだ。どんな問題でもそれほど深刻なものには思えなかった。良いこととして印象に残っているのは、私たちがどこに行き何をすべきなのか、生活のルールのようなものがはっきりしていたことだ。

そして皆がお互いにとって近い存在だった気がする。確かに生活水準はどこも同じだったけれど、そうかといってコンベアで作られた人形みたいに似ていたわけではなく、それぞれの生活には個性があった。(証言者 No. 21, ロシア人, 女性, サマルカンド)

さらに、ソビエト社会の構造やキャリアの仕組みは、人々を小学校から中学校、中学校から高校、そして高校から大学へ進学の際に必ず教育組織以外の共産党組織のメンバーにすることも想定していた。これは共産党の支持基盤の強化ということに加えて、国民の「社会主義的」、「共産主義的」な教育の一環とも考えられた。そのことから、ほとんどの人は小学校に入学した際にオクチャブリョノク(小学生共産組織員)になり、中学校に進学するとピオネール(中学生共産組織員)になった。これらの組織への入団は集団で行われていたが、学業や社会活動で特に優れた子どもは他の同級生より半年ほど早く入団すること

13) このことについての詳細は、ティムール・ダダバエフ『社会主義後のウズベキスタン—変わる国と揺れる人々の心 (アジアを見る眼110)』、アジア経済研究所、2008年、87-115頁、また187-201頁参照。

ができた。彼らの名前は全校集会で発表され、活躍している生徒として扱われた。これは共産党や政府から高い評価を受けたことであり、名誉なこととして受け止められていた。

これらの組織のメンバーになること自体、非常に重要なことで親は子どもの成長のステップの一つとしてみていた。当時の風潮やメディアの報道も組織の重要性などを訴えており、それが子どもたちにも伝わり、オクチャブリヨノクやピオネールになることを楽しみにしていた子どもが非常に多かった。

私たちにはオクチャブリヤータ（小学生の共産主義組織）への入隊があり、同級生の誰もが何か良いことを達成して一番に入隊しようとした。その後はピオネール（中学生の共産主義組織）への入隊があり、それも緊張する瞬間だった。残念ながら、今の子供たちはそのような良い意味での記念すべき瞬間を奪われている。ピオネールの後はコムソモール（共産主義青年同盟）への入隊があり、私は同級生の中でより早く入隊できた。私の娘も優秀で誰よりも早く入隊できた。私は大学2年のときには共産党に入党した。私の家族は全員共産党員で、当時の価値観として共産党員であることはもっとも教育水準が高く、育ちの良い家族の証明だった。私の娘は学校で金メダル（すべての科目で非常に優秀な生徒がもらうメダル）をもらって卒業した。しかし、彼女は1977年生まれで1990年代前半に学校を卒業し、そのとき社会に変化が見えはじめたため、共産党員にはなれなかった。*（証言者No. 12、ウズベク人、女性、タシケント）

コムソモールへの入団は多くの場合、集団ではなく試験や面接などを通して行われた。コムソモールは共産党員になる前段階として考えられており、そのことからコムソモール団員の選定は他の組織と比べて厳しく行われた。

そのメンバーになるための基準はかなり曖昧だったが、社会主義的な高い理想と深い認識、そして共産党組織の理解などは不可欠であった。しかし、面接の際にコムソモール希望者がそのような人格者なのか調べることは難しく、結果として共産党やコムソモールの歴史、レーニン主義やマルクス主義の内容に関する質問が多くなった。あるコムソモール入団希望者は、全ソ連で発行され

た『イズベスチア』という新聞が何個かの国家勲章を与えられ、それぞれの勲章はどのような理由で与えられたのかと聞かれ、答えられなかったためメンバーになれなかったという証言者の話もある。

そうした厳しさもあり、コムソモールや共産党員になった人はこれらの組織に対して忠誠心を持っており、様々な形で共産党員や共産組織長として関わった。それぞれの経験は人によって異なるが、以下の証言は、ある人の人生を通して、人々の共産党員としての立場とその仕事の大変さを描いている。

父は戦争中にコタツで足に火傷をしてしまい、戦争に行けなかった。しかし、その間はアルテル（農園）で働き、国に必要な食糧を提供していた。

私は学校の7年目を卒業すると、8～9年目は夜間学校に通いながらトラクターの運転士講座にも通った。その後、トラクターの運転士として働きながら、学校の10～11年目も卒業した。1967年にタシケント国立農業大学に入学し、仕事も続けてタシケント・コルホーズの請負集団長（brigadir）として働いた。大学卒業後はコルホーズ内のコムソモールの第一書記やコルホーズの労働組合長を務め、土地技術長になった。そして、最終的に共産党のコルホーズ委員会会長を務めるまでになった。それは当時の共産党の政治的な権力機関だった。

共産党は恐ろしいほどの力を持っていて、農業の建て直しや学校建設にももちろん力を入れたが、それよりも大事なことは人々の仕事に対する責任感を強め、姿勢を変えることだった。確かに、共産党の政策によって良くないことも起きた。例えば、国民のロシア化政策などはその一例だ。しかし、共産党が求めた各自の仕事と党に対する責任感の強化は正しくて素晴らしいことだった。その証拠に私は長年共産党員で、共産党のコルホーズ内のトップだったにもかかわらず、その立場を利用して（車はもちろん）自転車すらもらったことはない。横領など一切なかった。

他には、多妻の人には非常に厳しい処罰が与えられた。また、1人の妻とは別居中にもかかわらず正式に離婚していなければ、別の女性と同棲することは許されなかった。もし、そのような事態が党の執行部の耳に入れば、その人はすぐに仕事から外されて解雇された。それが共産党の偉い人でも一般

の党員であっても、党員資格を取り上げられるまでに厳しいものだった。党員資格取り消しは恐ろしい処罰だった。同時に、党はたまにやりすぎることもあった。素晴らしい人と評価していてもいじめたり、重い処罰から病気になるって後に心臓発作で亡くなったりする人もあった。

共産党員としてのもう一つの課題は、経済状況の向上に関する管理だった。例えば、ある農園には牛が何頭いて、1月にその牛が何キロになり、4月には何キロに達したか、もし成長がなければそれはなぜなのかといったことまで調べなければならなかった。

ある日、事件が起きた。牛が数頭、死んでしまったのだ。農園では総会を開き、その郡の共産党書記と私たち共産党責任者が参加して、総会のメンバーになぜ牛が死んだのかを問いただした。誰の責任かを追及することに集中した。しかし、どんなに聞いても誰の責任なのか、その防止策は何なのかについては結論が出なかった。会議は非常に長く、時間だけが過ぎていった。そうするとある長老が立ち上がり、共産党組織の書記に「人も様々な理由で亡くなるのだから牛だってそういうこともある」と発言し、この会議の意義を疑問視した。すると書記はその部屋から出て行き、私たちもやっとその重苦しい雰囲気から解放された。こうした経済に関連した会議がたくさんあって、かなり苦痛だった。(証言者No. 1, ウズベク人, 男性, タシケント)

このように、共産党での仕事は他の政府機関の仕事と関連しており、共産党員などにも多くのストレスをもたらしたが、利点もあった。共産党に入党する人は共産党、共産主義を信じきっていただけでなく、自分たちが住んでいる地域のために一所懸命働きたい、その地域に住む人たちの生活を良くしたいという気持ちが強かった。彼らは政策決定に直接関係していたわけではなかったものの、その政策を各地で実行する者としてそれなりの責任感を持って仕事をしていた。

ソ連の良かったところは社会保障だ。確かに、皆のレベルを同じにしようとする方針はあったけれど、就職の問題や失業はなかった。

義務教育は10年で、その後大学に進学する人と就職する人に分かれた。

制度として何より人々のやる気を促進していたので、誰もが共産党と共産主義を信じて仕事をしていた。私もそうだった。(証言者No. 28, ロシア人, 女性, ナマンガン)

しかし、このような人ばかりではなく、共産主義への忠誠をそれほど持たず、共産党関連の仕事を自分のキャリアの一部とみていた人も少なくなかった。それは特に第二次世界大戦以降に共産黨員になった人の間に多かった。彼らは共産党関連の組織を特別な使命と理想的な社会建設をめざす組織としてではなく、他の政府機関と同様に最高の権力を持つ機関としてみていた。彼らにとってそのような組織に勤めることは特別な社会的な立場を得たことと自分たちが管理職になったことを意味していた。このような人たちにとって、社会に対する責任や共産主義建設などは二の次であった。

こうした人々の日常生活とイデオロギーの間には矛盾があり、国家イデオロギーと自分たちの日常生活の間で何らかの形で妥協を求めて行動していた。以下はその一例である。

ソビエト政権は宗教に反対していたが、国民はそれでも宗教行事を行っていた。例えば、私の父はアルテル(農園)で働きながらイマームをやっていた。彼の会計役はいつもモスクに通っていた。誰かが(神への贈り物として)羊やカーペットを持ってくると、それを受け取ってモスクのために使っていた。

人々は普通にモスクにやって来て、政府はそれを見て見ぬふりしていた。唯一の例外は共産黨員だった。ウズベク人の共産黨員と共産党との間にはまるで子どものゲームのようなことが起きていた。共産党(監視員)がみている時に共産黨員はコソコソとモスクに来てお祈りを済ませ、隠れるようにモスクの裏のドアから出て行っていたのだ。他の宗教行事に関しても同じようなことが言えた。共産党としても努力したものの、誰もそれをやめさせることはできなかった。(証言者No. 1, ウズベク人, 男性, タシケント)

このような共産党のコントロールは社会のあらゆる分野において感じられて

いたが、多くの証言者は悪い部分とともに良い部分もあったと述べている。その良い部分が今になって多くの人から懐かしく思われている。特に、治安、行政機関の機能、これらにおける職員の規律や日常生活での人々の無責任な行動を制限することに関してはノスタルジーが感じられる。以下の証言は日常生活で複数の女性と結婚することを批判し、ソ連時代にはそのようなことはほとんどあり得なかったことを強調している。

当時は複数の妻を持つことは人々に批判され、通報もされた。皆行政機関や共産党が怖かったので多妻の人は珍しかった。

私は基本的に複数の妻を持つことには賛成できないが、特別な事情がある場合は仕方ないと思う。例えば、妻が寝たきりになってしまい、彼女と離婚するのは残酷だし、子どもたちと妻の面倒を男が1人で見るのも大変な時がある。そんな時は例外的なこととして考えるけれど、それでも基本的に複数の妻を持つことに私は反対だ。(証言者 No. 30, ロシア人, 男性, アンディジャン)

彼らは、当時の社会的な秩序や規律、そして共産党や政府と人々の責任感を懐かしく思う。特にソ連崩壊後の社会的な混乱、腐敗や経済不安の状況下で、ソ連時代の整然とした秩序は未練として心の中に残ってしまった。このような考えが表面化する契機は、独立以降のウズベキスタン社会の現状にある。

2.3 生活の安定と欧米型の民主主義

当時の考え方として、政府とは社会の一部を代表するというより国民全員を代表するものであった。政府が人々の日常生活に責任を持ち、その責任を果たす以上は、国民は政府についていくということだった。その姿勢からみえてくるのは彼らの政治そのものに対する関心の低さである。これまでの証言にもあるように、彼らの政治に対する関心は経済の状況と自分たちの日常生活に関わる部分にあり、それ以外については全面的に受け入れはしなかったものの、デモなど目に見えるような形での反対もしなかった。

私は国内の政治に口出ししよう、関心を持つとうと思ったことはない。そもそも情報がそれほどなく、どこで何が起きているのかさえもわからなかった。生活は平凡で平和だった。必要なものはすべて揃っていたし、好きな時にお店に行き、必要なものを買っていた。一番大切なことは生活に満足しているかどうかだった。

私たちはわずか60ソム（ルーブリ）の給料だったが、それで満足していた。誰一人豪邸に住もうと考えたこともなかったし、必要以上のものを買おうとしなかった。皆同じような生活を送っていたが、自分の家があり、家族がいればそれで十分だった。人々は誠意を持ってお互いに接していた。何かあると手伝いをしたり、誰かに迷惑をかけることのないよう気を配りながら暮らすのが当たり前だった。今みたいな状況ではなかった。（証言者No. 6, タタール人, 女性, タシセント）

数多くの証言から、政治と国民の間に暗黙の社会的な契約のようなものが存在していたように見受けられる。その仕組みはどの資料にも明確に言及されていないが、次のような印象を受ける。ソ連時代の共産党や政府は、国民の生活の面倒を全面的にみて、彼らに必要な最低限の生活を保障した。その代わりに、国民は団結して政府を支持していた。ソビエト社会における様々な制限を彼らは前向きに受け入れていた。以下の証言からもそうした関係を読み取ることができる。

今は、皆の唯一の夢と目標がお金をたくさん稼ぐことになってしまった。しかし、当時の状況は違っていた。学校に入学しても、どこか別の街に引っ越してもすべて奨学金で賄うことができた。私は高等教育機関で3年間勉強し、毎月25ソムの奨学金をもらっていた。それは私には十分で、余るほどだった。その奨学金で食事をし、服を買い、実家に帰る時にはお土産を買うこともできた。

私はあちこちの医療現場で看護婦として働き、看護婦長として定年を迎えた。給料は少なかったものの、主人がテュメンという地域で建設現場の職員として働いていたので、家にはいつでもお金があった。毎年、子どもたち

を連れてソ連の色々なところに行った。1000ルーブリもあれば余るほどだった。

当時、ロシアやウクライナに行くと、私たちがウズベキスタンから来たと言えば尊敬された。民族主義もそれほど強くなく、あなたはロシア人だ、タタール人だ、タジク人だなどという差別はなかった。1988年頃までに民族主義はなく、日常生活ではほとんど存在していなかった。

今から考えると、私たちは完璧な共産主義的社会を建設したのではなく、すでにその社会は完成していて、その中で生きていたようだ。(証言者No. 6, タタール人, 女性, タシケント)

そのような社会の中で、国民もある程度の犠牲を払わなければならなかった。政府が国民の生活を保障する代わりに、共産党や政府は社会監視能力も高め、人々の行動を規制していた。それは住民登録や綿花収穫の際の動員など様々な形で現れ、人々もそのような規制を自分たちの生活を確保してくれる政府や共産党の方針であれば間違いがないものとして疑わなかった。

住民登録は各住民が自分の住む場所を登録し、その住所から住まいを移す時に行政機関に届けを出し、事前に許可を得なければならなかった。各地区の警察官がこれらの住所を定期的に回り、違法な行為や反政府活動をしている人はいないか調べて、住民の生活を監視していた。そのような制限は住民にとっては間違いなくプレッシャーになったにもかかわらず、こうした政策によって犯罪率は低く、治安が維持されていたため、国民は住民登録制度に反対はしなかった。

この制度の犠牲者は、都市部の住民より地方出身者の方が多かったと思われる。なぜなら、彼らが都市部に引っ越すことは制限されていたからである。その目的は、生活環境がそれほど良くない地域にも労働者を安定して供給できる社会構造を作ることであった。しかも住民登録制度は転居のみならず、若者の一時的な移動も制限していた。例えば以下の証言のように、ある若者が首都タシケントの大学に行きたくても、住民登録に基づいて自分の住む州の大学に行かなければならない縛りもあったようだ。

私はタシケントの医科学部に入学しようと決めた。そしてタシケントに行き、医科学部に願書を提出しようとしたが、私の出身であるアンディジャン市にはすでに医科学部があったために、提示されたのは二つの選択肢だった。一つはタシケントではなくアンディジャン市に戻り、医科学部に願書を申請すること。もう一つは、タシケントの国立医学大学の歯学部が衛生学部に申請することだった。

私はタシケントの大学を選んだが、その時に聞いた説明によると各州からの入学定員が決められていて、その定員数を超えると入学試験の成績が良くても入学できないということだった。私は運良く入学できたがとても不思議な制度だった。（証言者 No. 17, ウズベク人、女性、タシケント）

また綿花の収穫では、学生や国家公務員などが動員されるのは政府や共産党の指令があったからである。それは国民が自分たちの生活水準や経済状況を向上させるために払うべき代価として考えられていた。ソビエト共和国間の労働分担制度のもとで、綿花生産はウズベキスタンのもっとも重要な分担領域として認識されており、ソ連が他の国からの綿花輸入に頼らずに済むかどうかは、ひとえにウズベキスタンの綿花生産の成功にかかっていた。

しかし綿花は手のかかる作物であり、こまめな手入れを大勢で行わなければならなかった。すでにウズベキスタンの農業では機械化が進んでいたが、それでも共産党や政府は国民に「自発的な」動員を促し、ウズベキスタンの代表的な作物生産への貢献を呼びかけた。

父はトラクターの運転士で綿花生産に関わっていたので、収穫の時期になると夜中の2時に戻ってきてご飯を食べると2～3時間寝て、また収穫に出かけていた。

私は小学校に通っていたけれど、皆10月から1ヶ月半ほど綿花畑にかり出された。この時期は学校が閉められ、全員で綿花を集めていた。

もしどこかのコルホーズで11月7日までに収穫目標が達成されたとしたら、大変な騒ぎになってお祝いが開かれた。その日は革命記念日で、「何とかコルホーズの何とかコルホーズ長は、革命記念日までに目標達成を報告し

た！」と大々的にアナウンスされた。逆に、12月になっても目標を達成できなければ、それは大失態とみなされた。そのコルホーズ長が共産党員であれば共産党員資格停止や除名までされるのだった。(証言者No. 19, タジク人, 女性, サマルカンド)

次の農民の女性は、綿花収穫に動員されたことの辛さを以下のように説明している。

私たちがコルホーズで働いている間に、畑の横の木の下でスープが作られていた。午前の仕事を終えるとその汁をもらいに行き、それで昼食を済ませた。また仕事に戻ったが、コルホーズからの夕食は出なかったので夜は家で食べた。

綿花畑では子どもを抱きながら働いていた。自分のお腹の辺りに子どもを縛り付けて、綿花を集めた。2人目が生まれた時、1人目がある程度大きくなっていたので、その子は畑で遊ばせて、生まれたばかりの子を体に縛り付けていた。子どもに加えて家の牛や羊も一緒に畑の近くまで連れて行き、働きながら家畜の面倒もみななければいけなかった。あなた方はその時期を経験していないからわからないと思うけど、それはもう大変だった。(証言者No. 27, ウズベク人, 女性, ナマンガン)

共産党や政府は表向きには綿花収穫の呼びかけを、国民による社会主義経済の成功のための貢献と謳った。しかし、その裏には学生や都市部の市民の労働力が安く、機械や農民によって収穫される綿花の買い取り価格よりも低い値段で買い取ることができたという台所事情があった。

毎年11～12月にかけて、私たち学生は畑にかり出され、綿花を集めさせられた。12月に雪が降っても続けさせられたあげく、その労賃は非常に安かった。綿花栽培の責任者が誰かが私たちの上前^{うわまえ}をはねていたのかもしれない。そんな裏事情まではまったくわからないが、(私たちの労賃を搾取した)泥棒も多くいたと思う。

私たちはとにかく朝から晩まで働かされたが、何か文句を言える雰囲気ではなかった。年齢や立場が上の人に少しでも文句を言うと、専門学校から追い出されるか、全校集会の議題にされて恥をかかされるからだ。ただ言われたことをやるしかないという思いが、何よりも先に働いた。(証言者No. 11, ウズベク人, 女性, タシケント)

綿花収穫に動員された人の生活環境は劣悪で、親は食べ物や着る物などを持って子どもに会いに行っていた。それは市民がこの制度に対応する唯一の方法であり、その2～3ヶ月は我慢するしかなかった。そのような状況での作業は形式的なものになってしまい、しだいに共産党関係者も学生や農作業に慣れていない市民の効率を疑問視し始めた。

学生たちは朝、必要最少限の綿花を集めて午後にはその綿花をベッド代わりにして畑の人にみられない場所で寝るなどして時間を過ごしていた。以下の証言にもあるように、収穫にはそれほど力を入れずに手を抜くこともあったようだ。

私たちは小学生の時から綿花を集めに出ていた。大学生になると毎年2ヶ月間収穫にかりだされ、(在学期間)5年の内1年間も収穫に携わったことになる。

収穫先の住まいは最悪の状況だった。また集めた綿花の価値がどれくらいあったのか私にはよくわからないけれど、その綿花の中から小さなゴミを取り除き、さらにきれいにしなくてはいけなかった。雪が降っても私たちは綿花を集め続けた。2人の同級生が紐を両側から持ち、畑の数列分にわたして葉っぱから雪を落とし、私たちは雪が落とされた綿花を手作業で集めるのだった。(証言者No. 30, ロシア人, 男性, アンディジャン)

労働環境の悪さや賃金の安さから労働意欲を失う人も多かった。しかし、興味深いことにこのような動員はウズベキスタンの人々からは仕方がないものとしてみられており、それさえ我慢すれば、それぞれの生活の安定が確保されると思われていた。

だからこそ住民登録や綿花収穫への動員は政権に対する不満を引き起こしても、それに基づく反政府活動まではともなわなかった。政権に対する不満そのものもそれほど高くなく、市民レベルではお互いに文句を言い合うことはあっても、日常生活ではそのような不満は忘れられていったのである。

3. ソ連時代の日常生活と経済

3.1 日常生活の実態

国民のソ連時代の記憶には日常生活が非常にはっきりした形で残っている。彼らは様々な困難と共産党・政府による制限などを経験したが、日常生活に関しては大半の人が満足していた。以上にも述べたように、共産党・政府と国民の関係は安心と安定した生活水準を政府が確保し、国民はその政治方針についていくという構造ができていたため、共産党と政府は人々の日常生活の向上に力を入れた。そのことから当時を経験した人はソ連時代の暮らしにノスタルジーを覚え、できればもう一度あのような社会と経済制度を経験したいと言う。

あの時代の良かったところは、やはりソビエト国家が人々に教育を無料で与えたことである。しかし、それをうまく利用しなければならなかった。また、医療機関や幼稚園などもすべて無料だった。明日のことを心配しなくても生活できた。

お店にはいつ行ってもすべての商品が並んでいたもので、家に何かを備蓄しておく習慣もなかった。それから習い事もしていた。生活に必要なものは安く供給されていたから、安心して自分の趣味に打ち込むことができた。

生活が安定しすぎて明日は暇な時間をどう過ごそうかと思ったこともしばしばあった。今はやることが多すぎて、明日はどの用事からしたらよいかかわからないくらい忙しい。こんな状況で誰に本を読む暇があるのか！ しかも毎日精一杯仕事をして、それでお腹がいっぱいになるほど食べられるくらい稼げるかどうかかわからない。私からみるとソ連のすごさは、貧乏でも明日に関して不安がなかったことである。（証言者 No. 2, ウズベク人, 男性, タシケント）

以下の証言は、商品の安さと安定的な供給が人々に安心感を与え、彼らが自分たちの将来を心配せず生活できたことを表している。それが彼らの記憶の中で当時を象徴している。

水道料金は無料で、店にはすべての食料品があり、非常に安かった。1ティン（筆者注：1ルーブリ=100ティン〈ロシア語でコペイカ〉、1ティンは最小の単位）でマッチが買えた。路面電車の運賃は3ティン、トロリーバスは4ティン、バスは5ティン、特急バスは10ティン、乗り合いタクシー（11人乗り）は20ティンだった（筆者注：1970～1980年代当時の1ドルの公式レートは59ティン、非公式レートは1ソム）。*

私は父を早くに亡くし、母も病気がちだったため兄弟の親代わりとしていろいろな役割を担っていたが、毎日充実していた。仕事をしながら勉強もしていた。家族の生活が保障され、自分の学習意欲も満たされていた。その頃は事務員の仕事をこなし、記者になるためにジャーナリストの勉強をした。

大学卒業後は、自分の専門分野ではなかったもののメトロに就職し、駅員やメトロの会計士などをした。24～25歳の時だったと思うが、休みの日にはレストランにもよく行っていた。（証言者No. 37, ウズベク人, 女性, タシケント）

別の証言者も経済的な問題がなかったことから人々は自分の時間を持ち、あらゆることに関心を広げることができ、社会全体が明るい雰囲気だったと強調する。

一番記憶に残っているのが、明日の生活を心配する必要がなかったことだ。仕事はあったし、仕事が見つからないという人はまずいなかった。給料も支払われるべき時期にきちんと支払われた。

人々は勉強をしたり食事に出かけたり、余裕があって生きることを楽しんでいて。（証言者No. 48, タジク・ウズベク人, 男性, プハラ市）

ある証言者が使った表現として、ソ連時代のウズベキスタン国民は「満腹」

(toqin-sochin)を感じており、その「満腹感」からこれまでに挑戦しようと思わなかったことにまで挑戦するようになった、という。

もう一人の証言者も当時の生活について「満腹」という言葉を使い、その実態を説明している。

私はソ連時代の方が好きだった。なぜなら、すべてのものがあり、私たちは満腹 (toqin-sochin) だった。私は45ソム (筆者注：ソ連時代の通貨はルーブリだったが、ウズベク語の会話ではルーブリのことを「ソム」と呼んでいた) しかもらっていなかったけれど、家族全員に必要なものを買うには十分だった。たったの45ソムでだよ！私の夫は55ソムをもらっていたが、その後65ソムになった。彼は数学者で博士候補号 (kandidat) を取得した。私たちの3人の子供は全員大学を卒業し、1人は歯科医になった。2人目は工科大学を卒業したけれど、今は自分の専門分野で仕事がないため別の分野で働いている。ソ連時代に関して私はネガティブなことを知らない。実感したこともない。* (証言者 No. 12, ウズベク人, 女性, タシケント)

ソ連時代の制度は平等主義を促進しようとしていたため、国民の生活は似たようなものだった。大多数の人は (特に60年代から80年代の間の時期に進学率はほぼ100%)、小学校から高校までの教育課程を経て大学に進学し、それぞれの専門分野で学び卒業した。そして国家公務員になるか、政府が運営する企業に勤めるかしていた。

彼らの多くは政府からアパートを支給され、そのことから生活環境は非常に似ていた¹⁴⁾。国家公務員であれば給料にそれほど違いはなかった。それは日常生活を不自由なく送れるよう計算されており、支給額が低くても生活に困る人はいなかった。

14) このようなアパートの支給について、各住民に1部屋ではなく、1人당りに10平方メートルを支給することがノルマとされていたため、アパートが足りず、複数の家族が一つのアパートで共同生活をする人が多くなった。そして、そのようなアパートは「コムナルカ」とよばれ始めた。その分析については、Svetlana Boym, *obshchie mesta : Mifologiya posvednevnoi zhizni*, Moskva : Novoe Literaturnoe Obozrenie, 2002. 159-216頁参照。

あの時代の給料は、生活に必要なものの価格と釣り合っていた。例えば私は当時120ルーブリをもらい、それでソ連の端から端まで行くことができた。120ルーブリは決して高い給料ではなかったのに、毎年家族を連れてバルト海まで行っていた。もちろん、私の給料は海外のものとは比べても低かったが、海外の給料は高くても物価も高かったから、私の生活はそれなりに良かった。

私たちは共産主義時代に生きながら、そのことに気がついていなかった。フルシチョフの『次の世代は共産主義を経験する』という言葉がそのまま実現したことさえ、私たちにはわからなかった。当時は生活も楽だったし、出生率も高かった。今の給料は年々増えているけれど、インフレのことを考えると事実上給料は減っている。多くの物の値段は世界的な水準なのに、給料の上昇率は低い。労働者や一生懸命働いていた人にとってはソ連時代の方が住みやすかったし、ソ連時代に対してノスタルジーがあると思う。それは、年寄りの世代のみならず、その次の私たちの世代にも見られる。*（証言者 No. 2. ウズベク人、男性、タシケント）

このように人々の給料はお互いに似通っており、大半の人はそれに満足していたようだ。しかし、以下の証言はそうした生活を嫌い自分の生活をより良くしようとする人である。そのような人は複数の仕事を持ち、寸暇を惜しむように働いて他の人よりも多くの給料をもらい生活をより豊かにしていった。

私は二つの学校で同時に働き、一方の給料で別荘を建て、もう一方の給料で家族を養っていたので良い暮らしができていた。今なら10ヶ所で働いても大したお金にならない。（証言者 No. 8, ウズベク人、男性、タシケント）

3.2 日常生活における問題点と腐敗

ソ連時代について国民に問いかけた時、政権は非常に厳しかったものの、国民に対しては公平な政権だったと口をそろえる。彼らは以上の節で述べたような様々な規制や制限を良く思わなかったとしても、それらがなければ社会はもっとひどい混乱に陥る可能性が高かったと言う。大半の人はあの時代は反政府

活動や何かの容疑で犯罪者扱いされたり、悪いことに手を染めたりしなければ良い時代だったと言う。しかも、その意見は非常に多くの人に共有されており、彼らは当時の規律と政府、人々の責任感を高く評価している。

以下の証言にもあるように、彼らはスターリンの肅清でさえ、ある程度正当化できるものとしてみている。

ソ連時代は自分のことしか考えない人にとっては良くない時期だったが、自分のすべてを国、(戦争での)勝利、国民と(共産)党に捧げた人はいつでも良い生活をしていた。ところが今は嘘つきが多く、当時のことを悪く言うけれど、そんなことはない。例えば、医者や看護婦たちの仕事ぶりをみてもわかるように、彼らは24時間私たちの面倒をみてくれた。

スターリンについては、私たちの世代は良い人と思っている。彼は悪いことをした人間じゃない。国民のために戦って改革も起こした。そのおかげで人々の生活水準は上がった。時代が変わって、上にいる人たちは彼を悪く言うけれど、私はそうは思わない。スターリンを悪く言うの方が大体悪い人だと思っている。彼らは私たちが経験した時代のことを何も知らず、私たちが直面してきたことを何もわかっていない。戦争がどれだけ厳しかったか、食事が無いことはどれだけ辛いのか、最前線で戦っている兵隊のためにすべてのことを犠牲にすることがどれだけ難しいか、彼らにはわからない。

スターリンは自分の敵は容赦なく弾圧したけれど、それは国民に平和が必要であることをわかっていたので、その活動をやめさせただけだ。それは正しい道であって、私の人生があるのはそれが正しい選択だったことの証だ。戦後の生活は苦しかったけれど、その中でもやはり良い部分が多かった。(証言者No. 6, ウズベク・タジク人, 男性, ブハラ州)

さらにソビエト政権の評価と現代におけるノスタルジーの一つは、当時の犯罪率が低かったことと、政権が腐敗と真剣に戦ったイメージがあるからだ。ソビエト政権を経験した人の多くはこの点を強調し、犯罪、賄賂、立場の私利利用などは非常に厳しく処罰されたという。

今のように好き勝手に自分の判断で仕事をするとはなかった。皆にはっきりした責任の分担があって、その分担を満たさない人は処罰を受け、満たしている人はその分優遇されていた。

当時の政権は腐敗や賄賂に対しても厳しかった。誰も自分の立場を利用して賄賂を受けとったりすることはできなかった。もしすれば、すぐに逮捕されると知っていたので恐れていた。

それと商品の値段が決まっていたので、値段を付け足して販売することは禁じられていた。ある商品の値札に1ソムと書いてあれば、誰もそれを2ソムで売ることではできなかった。(証言者No. 2, ウズベク人, 男性, タシケント)

しかし、このようなソ連時代のイメージは必ずしも正確なものではない。第二次世界大戦以降、人々の生活が安定し社会に様々な問題点も現れ始めた。そのもっとも典型的な例は生活必需品の不足である。

当時の社会的な風潮がある証言者は以下の言葉で語り、人々は戦争が終わり平和になったことを楽しみすぎて、社会が直面している問題を解決する努力をあまりしなかったと指摘する。

戦争が終わっても経済の状況は良くなかったけれど、しだいにすべてのことが落ち着き、経済成長の影響で機械が多くの作業をするようになった。経済が安定してくると、皆が生活や仕事に関して楽観的になりすぎ、50年間も遊んで、(戦争での)勝者としての立場を楽しんだ。あらゆる場で私たちは勝者であると発言し、他の国を見下してきた。その結果、世界がどんどん発展して、私たちは追い越されてしまったのだ。私たちは楽観的になりすぎて、ウォッカを飲んで踊り楽しんでいたのでこれは当然だ。

しかも私たちが忘れていたのは、戦争が終わって50年の間、世界中から様々な物をもって生活してきたことだ。国際支援もあった。それをモスクワが使い、各共和国に配分していたんだ。(証言者No. 26, タタール人, 女性, ナマンガン)

特定の商品がなくなったり、少なかったりすることをデフィチトとよんでおり、珍しくて不足しがちな商品もそのようによばれていた。そうした商品を探めて店の前に列ができることは多く、たくさんの店が同じ地域にある場合は、人々の並ぶ姿が絶えることはなかった。

通りがかりの人は列の最後にいる人に、それぞれの列はどの商品のために並んでいるのかを確認し、その列に並ぶかどうかを決めていた。仕事を抜け出して、目的の商品を手に入れるため何時間も列に並ぶこともよくあったという。

私は1955年に生まれ、ブレジネフ時代に子どもの頃を過ごした。ソ連時代から一番嫌だったことは物が無いのと行列だった。並んで手に入れなければならない物は生活必需品ばかりだった。(証言者No. 20, タジク人, 男性, サマルカンド)

そのような事情を逆手に取ったのは店の販売員であった。彼らは人気のある商品をあらかじめ隠しておき、その後知り合いや通常の値段以上を出してくれる人にこっそり販売していたのである。

当時、「ポド・プリラフカ (売り場の裏)」という現象が起きていた。これは良い服は売り場を通してではなく、一般の客の目にふれないところに隠しておき、高い値段でも出してくれそうな客が来た時に店員が密かにその商品を見せ、値札以上の金額で売りつけることだ。上乘せ分は店員が手にして、レジには値札の金額だけが入る。そんなことがよくあった。(証言者No. 2, ウズベク人, 男性, タシケント)

販売員として勤めていた人からは、直接ポド・プリラフカに関する話は聞かなかったものの、ソ連時代のウズベキスタンにおいて販売員がどれだけ特別な立場にあったのかは以下から想像することができる。

母は量販店に勤めていたので、いつも家に一番良い食料品を持って帰ってくれた。乳製品などすべてが家にあった。食べ切れずあまり古くなって捨

てることもあった。

夫も食料品の販売の仕事をしていたので、仕事場からキャビアやイクラなどを持って帰ってきてくれた。彼は兵役から戻ってくるとタシケントのフルンゼ区の販売センターで勤め始めた。彼との結婚は私の親戚の紹介で、彼について「家族の面倒をみることができる人だ」と言った。それで彼に関心を持ち、私も早く結婚すべき年齢だったのでちょうど良いと思った。

彼はまず食器の販売員として働き、私たちの家は食器でいっぱいになった。その後、彼はタシケントのいくつかの病院に食料品を配給するセンターに移り、私たちはまったく問題なくあらゆる食料品を手に入れることができた。皆に羨ましがられるほどだった。誰かの家に行く時はいつも食料品を持って行っていたので、親戚や友人は私たちが来ることを楽しみにしていた。(証言者 No. 6, タタール人, 女性, タシケント)

ソ連時代は家具に人気が集まり、商品が裏で売られていた実態を別の証言者は以下のように語っている。

当時、私は結婚の準備に追われていた。まだ専門学校の学生だったけれど、もうお店に勤めていた。ある日、専門学校で家具の購入券を引くゲームがあって、私はキッチンで使う家具の1等賞のくじを当てた。しかし、すでにそうした物は持っていたので、そのお店に行き販売責任者と交渉して、リビング家具（ソファ、テーブルなどのセット家具）に換えてもらった。それはルーマニア製で素晴らしかった。当時の値段で1000ルーブリしたが、240ルーブリの賄賂を渡すと地下倉庫に案内され、その中から自分が好きな家具を選ぶことができた。倉庫にはもっと素晴らしいものがたくさんあってすごく楽しかった。

私はあまりお金がなかったので、母親から500ソムを借りていたが、残りは自分で稼いだお金で支払った。私はお店を見て回るのが好きで、給料をもらおうとすぐにチョルスーとグム（GUM百貨店）廻りに行った。(証言者 No. 14, ウズベク人, 女性, タシケント)

このような腐敗や横領がソ連時代にあったにもかかわらず、多くの人はこれらを欠点の一つとしてくらいにしかみておらず、これは経済制度が引き起こした結果であり、ソ連解体の根本的な理由であるとは思っていなかった。

同時にこのようなことはソ連時代の政治エリートと国民の間に格差を生んだ。政府の指導部が横領などを行うのに対し、国民も日常生活において必要なものを様々な手法で手に入れようとしていた。それが結果として、ポド・プリラフカ型の販売が現れ始めたきっかけとなった。共産党や政府の指導部は、それをわかっていながらも効果的な処置をとれずにいたのが現状であった¹⁵⁾。

私たちは治安関係機関の幹部の家族であったことから、生活は特に良かった。今になってそのありがたみがよくわかる。当時は半月に一度給料をもらっていたので、お金が入る確信があったから何でもできた。

もし、ソ連時代に家のリフォームをしようと思えば、今よりも早くそれを終わらせることができたと思う。今はリフォームを始めてもずいぶんお金がかかり、いつ終わるかかわからないような時代だ。(証言者No. 6, タター人, 女性, タシケント)

彼らは現在の生活から、自分たちが失ったものの重大さを初めて認識するようになった¹⁶⁾。ソ連時代における様々な問題が1980年代前半からペレストロイカの時期にかけて明るみに出始めたことから、国民もソビエト政権や当時の良さを考え直すようになった。それでも大多数の人は、ソビエト政権には欠点はあったものの、それは個人の利益追求のためではなく、人々の生活をより豊かにするために生じたことであり、結果として失敗に終わったに過ぎないと思っている。

15) ソ連時代の汚職とそれに対するソビエト政権の対策の矛盾については、T.S.Kondrat'eva, "Material'no otvestvennye liitsa pri rezhime sotsialisticheskoi sobstvennosti", T.S.Kondrat'eva, A.K.Sokolova, *Rezhimnye lyudi v SSSR*, Moskva : Rossiiskaia Politicheskaiia Entsiklopediia, 2009, 128-144頁参照。

次の証言は、ポド・プリラフカが存在したのもソ連時代のウズベキスタン社会には経済力があり、値札以上の金額を払える人が多かった証拠だと結論付けている。

人々にはお金があって生活は安定していた。お金を持っていないと「ポド・プリラフカ」のような売り方は成り立たない。私は人生を振り返ると、やはり1970-80年代までが一番良かったと思っている。(証言者No. 14, ウズベク人, 女性, タシケント)

3.3 孤立した国でも気に入っていた

ソ連時代のウズベキスタンは他の世界から孤立したイメージがある。確かに、国民の大半はソ連以外の国へ旅行する機会がなく、ウズベキスタン国内かソ連各地を巡っていた。海外に出ることを許される人は少なく、その人たちも資本主義国ではなく、社会主義国に出かけることだけが許されていた。その政策の主な目的は「腐敗とモラルの低下を引き起こす欧米文化」がソビエト国民を直撃しないようにするためだった。そのため、海外に行く人は必ずそのモラルや考え方に関して面接を受け、海外へ出すことに相応しい人物なのか評価され、判断が下された。

しかし、そのような扱いを受けて不快な思いをした人も多く、この政策は嫌われていた。何か疑わしい人物のように扱われて、「最終的に海外への旅行や出張の後味を悪くしてしまい、あまり楽しむことができなかった」と言う。別の人はその様子を以下のように説明している。

国内の移動は自由だったため、私もソ連各地に行っていた。しかも、私は1963年にGDR（ドイツ民主主義共和国）にも旅行することができた。しかし、それまでに必要書類を渡航の3ヶ月前までに政府機関へ提出し、いくつかの面接を受けなければならなかった。

16) ソ連時代における特権を持った人たちの生活については、T.S.Kondrat'eva, "Obladateli 'Kremlyovki' i lyudi na khlebnykh mestakh", T.S.Kondrat'eva, A.K.Sokolova, *Rezhimnye lyudi v SSSR*, Moskva: Rossiiskaia Politicheskaia Entsiklopediia, 2009, 279-302頁参照。

その政策では、ワルシャワ条約加盟国に行くのはある程度許されていたけれど、資本主義国に行くのは不可能なことだった。社会主義国に行こうとしても面接で落とされることがあったのに、私は許可された。（証言者No. 4, ウズベク人, 男性, タシケント）

このような閉ざされた環境は国民に海外への関心を薄れさせ、彼らが「内向き」になってしまうことにつながった。それでも海外に関心を持っている人はテレビ番組などを通して情報を入手していたが、実際の旅行ではソ連国内を回っていた。人々は海外に無関心になり、テレビ番組の情報で十分満足していた。むしろ機会があるたびに、ソ連各地を旅し、ソビエト国民の多様な文化や生活に関心を示していた。国民の多くは、こうした意識が政府の監視とコントロールにより形成されたとは認識していなかった。そのことをうまく表現しているのが以下の話である。

私は大学卒で、SAMSI（中央アジア医学大学）を卒業した。私たちの実務経験はキエフ（ウクライナ）で行われ、旅費と生活費すべてを国が負担してくれた。私たちは国の負担でハリコフやチェルニゴフを回り、いろいろな博物館を訪ねた。当時は学生券（学生証提示による学割制度）というものがあって、それを使って博物館などに行った。

確かに、ソ連という国は閉じられた国だったが、私たちは特に気にはしていなかった。外の世界に出たいという気持ちもなかったし、国内が非常に楽しかったのだ。ソ連が解体されつつあった1990年にも、私は150ルーブリでレニングラードまでの往復切符を買うことができた。そういう意味で、私には良い思い出しか残っていない。*（証言者No. 18, タタール人, 女性, タシケント）

このように孤立していてもウズベキスタン国民にはそのような実感がなく、彼らは機会を見つけてはソ連の他の共和国や社会主義国への訪問を楽しんでいた。その一つが新婚旅行である。就職していれば、旅行をする経済力があり、給料が少ない人でもウズベキスタン国内もしくはソ連各地を回ることができた。こ

のような海外旅行を必ずしも希望しておらずソ連国内で旅行することを楽しんだ人はウズベキスタンのみならず、以下の証言のようにソ連各地に多かったようである。

海外に行くことができたし、行くことは役に立つものでもあった。しかし海外に行く前に自分の国を学び、わかり、ゆっくりみる必要があった。その理由は、海外を旅するための比較材料がない人が自分の国に対する評価に過小評価が出てきて海外の過剰評価につながる可能性があるからである¹⁷⁾。

次の人のように、社会的な立場も給料も高く、何かしらのコネクションがある人であれば、ソ連と友好関係にあった社会主義国を旅行するのは難しいことではなかった。

私は新婚旅行はソチ（黒海東北岸のリゾート地）に行きたいと父に言った。そうしたら父が仕事場から旅行を手配してくれる知人に連絡してくれて、ブルガリアとルーマニアのパッケージツアーなら両方を観光できると勧められたので、私と夫は行ってきた。

それから私は毎年モスクワへ、お金のことは何も考えずに行っていたけれど、今はそのようなことはもうできない。（証言者No. 18、タタール人、女性、タシケント）

新婚旅行や家族旅行以外に、ソ連内の共和国間では留学制度が盛んで、学力がありさらに勉強したい人であれば、他の共和国へも留学が可能だった。特に、留学生はモスクワやレニングラードの大学に留学していた。現在では経済力がある人が留学することは多いが、当時はむしろ貧しい家の子どもが優先的に奨学金を受けられ、大学入試の際にも特別枠で入学が認められていた。そうしたことから、国民は制度を利用してロシアやウクライナなどに留学していた。以下はその一例である。

17) この証言はロシア在住のある人物の日記からの引用である。詳細については、Natal'ya Kozlova, *Sovetskie lyudi : Stseny iz istorii*, Moskva : Evropa, 2005, 180頁参照。

祖父も両親も学校の先生だったので、周りの人は私をよく先生の孫とよんでいた。両親はタシセントで生まれ育ち、住んでいたマハッラで教育活動を行っていた。その影響を受けて、私と3人の兄弟は全員大学を卒業した。一番上の兄は外国語大学のフランス語学科を卒業し、次の兄はモスクワで大学院に通った経験もある。弟はタシセント工科大学を卒業し、私も外国語大学を卒業した。皆大学を出られて良い時代だった。

当時は勉強もたくさんしたけれど、学期の間の休みにはあちこちの都市を回った。私が小さい頃は、兄がモスクワの大学院に通っていたので、彼のところに親とよく行ったものだ。大学に入ってからとは同級生と何度もモスクワに、それからレニングラードや他の社会主義国にも行っていた。(証言者 No. 5, タタール人, 男性, タシセント)

ウズベキスタン国民がソ連各地の人と交流するもう一つの機会が、兵役制度である。この制度では18歳に達した青年のほとんどに兵役の義務があり、2～3年程度はソ連軍に入らなければならなかった。自分が生まれ育った地域以外に配属されることが圧倒的に多く、多様な環境での勤務を通して様々な地域での戦いに備えるよう訓練された。ウズベキスタン出身者はロシアなどに配属されることが多く、多様な価値観を持った民族の人と同じ部隊で訓練を受けた。その中には配属先で知り合って結婚を決めた人も多く、彼らは妻になる人をウズベキスタンに連れて帰った。

ソ連軍が1979年にアフガニスタンに侵攻した時、その最前線でアフガニスタンに入っていたのがウズベキスタンを含む中央アジア出身の兵士だった。彼らは国境地帯にも多数配属され、以下のような作業をしていた。

私は国境街のクシカに配属されていた。国境の向こう側がアフガニスタンで、ソ連（トルクメニスタン）側で戦車の整備士をしていた。

当時のアフガニスタンは安定していたが、暑さは大変なもので、日が当たらない場所でも気温は50度もあった。戦車の中には人が入れないくらいだった。兵隊同士の関係は良くなくて、先輩の兵隊が後輩をいじめたりして、環境の問題に加えて人間関係にも気を遣わなければならなかった。(証

言者No. 1, ウズベク人, 男性, タシケント)

中央アジア出身者は単に訓練に励んでいたわけではなく、以下の話にあるような興味深い体験もあったようだ。

当時のソ連とアフガニスタンの関係は良く、ソ連はアフガニスタンから綿花を輸入していた。そのためソ連がクシカからカブールまで非常に良い道路を作り、多くのアフガン人がソ連側に渡って貿易などをしていた。

私たちが兵役を終えて家に帰る時期が来た。ある日、街のレストランに入ると、そこにアフガン人が入って来た。彼がアフガニスタンのウズベク人だとわかり、私の友達のウズベク人が彼と話し始めた。

彼に年齢を聞くと30歳だと言われ、まだ結婚していないこともわかったので理由を尋ねた。すると彼は農民の娘を嫁に迎えるべきなのか、それとも都市で嫁を探すべきなのかで迷っていると答えた。農村部から嫁をもらうと花婿が花嫁に払うお金が高いが、都市部の嫁には払うお金が少ないと話してくれた。「なぜ悩むんだ？ それなら都市部から教育を受けた、しかもお金の支払いが少なくてすむ嫁をもらったら良いじゃないか？」と言うと、彼は「都市の娘は気が強くて、ろくに話を聞いてくれないけれど、田舎の娘は何をしても我慢してくれる。田舎からもらった嫁はたとえ殺しても誰からも文句は言われないけれど、都市部からの嫁はそうはいかない。」

同じウズベク人でもソ連時代に生まれ育ったウズベク人とアフガニスタンのウズベク人とでは、考え方に大きな違いがあるんだなと思った。(証言者No. 40, ウズベク人, 男性, フェルガナ州)

ま と め

本章の目的は、ソ連時代を生きた人々がソ連崩壊後に独立国家として生まれ変わったウズベキスタンにおける生活の中でソ連時代をどのように記憶しているのか、彼らがどのようなことを経験してきたのかを記録することであった。本章は、人々の記憶を主な分析の対象としているが、そのような記憶が客観的で

あり、また歴史について最終的な結論を見出せるものであるとはしていない。歴史を見直す際に、記憶を慎重な姿勢で扱うべき点については本書の中でも注意を払ってきた。

あるロシアの哲学者が、「現象と本質として、記憶は単純ではなくて矛盾が多い、非常に複雑なものである。記憶は裏切ることも騙すこともできる」¹⁸⁾と述べるように、記憶は多面性を有するものである。その一例として、ノスタルジーを感じ、毎年の価格切り下げと秩序を懐かしがるソ連時代の支持者と、現在の新しい経済社会状況下で良い社会的な地位を得、ソ連時代の良くない部分のみを強調する者とがいる。

そういう意味では、記憶は特別な注意を要するものである。過去を過剰に美化し過去にノスタルジーを感じながら生きることは今の自分を否定することになるように、過去を拒否し、今の自分を過去から切り離して生きることは社会が独自性を失うことにつながる¹⁹⁾。

18) Valentin Tolstykh, *My byli : Sovetskij chelovek kak on est'*, Moskva : Kul'turnaia Revoliutsiia, 2008, 13頁参照。

19) 類似の考え方については、Valentin Tolstykh, *My byli : Sovetskij chelovek kak on est'*, Moskva : Kul'turnaia Revoliutsiia, 2008, 18頁参照。